

窟生活をして居つた北西地方の支那人が、その住居になぞらへて考へ出した産物と見るべきではなからうと思ふ。この佛洞の創始せられた後、これが如何なる順序で發展したかについては、詳細の記録の存するものはない。前記聖曆元年の大周李君修功德記にも、樂傳の一龕を作つた後に、法良禪師といふものが東から來て、更に窟を作つたことが記されて居るし、またその後接して、「有_二刺史建平公、東陽王_一」缺七後合州黎庶、造作相仍、實神秀之幽巖、靈奇之淨域也」とし、その輪奐の壯美、刻石彫檀の巧妙、緇素の歸敬の有様なども記し、且つ「缺七大周聖曆之辰、樂傳法良發其宗、建平東陽弘其迹、推甲子四百他歲、計窟室一千餘龕、今見置僧徒」云々と見て居るが、これまでの記録がありながら、此等の人々の時代、從つてかゝる營造の時代を明かに知り得ないのは遺憾である。兎も角聖曆元年の頃には_二聖曆元年は前記佛洞創始の時から數へれば三百三十四年ばかりで、四百他歲といふのは誇張であり、洞窟の數もほゞ五百許りに過ぎないが、そこは支那流の行き方で必ずしも依據するに足りない_二既に窟龕の數も甚だ多く、壯大な伽藍や塔の建立も出來上つて居つたものであることは疑ない。スタイン氏がこゝから獲た書物の中に、敦煌錄と題した地志の殘卷があつて、既に大英博物館のジャイルス博士によつて二度も翻譯せられ(Journal of the Royal Asiatic Society, 1914 & 1915)、また我が大日本佛教全書遊方傳叢書の第四にも収録せられて居るが、その中には可なり寫實的に當時の千佛洞即ち莫高窟の有様も記されてある。この書はいつ出來たものであるかは明かでないが、その中に載せてある地名、文句の書き方、文字の體裁などから考へると、唐代のものであることは疑ないと見られて居る。ジャイルス氏や遊方傳の讀み方には、多少の賛成し難い所もあるから、次に關係の部分丈を抄出して見やう。